

じょうせつてんじ のうぐ しゃしん のうぐ ぶく
 常設展示されている農具 (写真の中の農具も含む)

No1

 <p>アイグワ</p>	<p>田のまわりに土をぬって、あぜを作ったり、苗代の土を平らにししたりする時に使った。鍬(クワ)先の部分だけが金属で、あとは木でできている。柄(え)と台の角度が小さく、細かい作業に使ったと思われる。</p>
 <p>オワリグワ</p>	<p>カラスキで耕せない田の隅を耕したり、水がこぼれないようにため池の土手をたたいて、土を固めたりした。柄と台の角度があり、耕したり、掘ったりするのに適していた。</p>
 <p>カラスキ</p>	<p>牛に引かせて、かたくなった田の土を掘り起こし、やわらかくする。下部に三角形になった金属がついている。</p>
 <p>マンガ</p>	<p>まぐわともいう。からすきで田をすいて、土を掘り起こすが、おこした土は塊になっているためこれを砕いて平らにするために用いた。牛や馬に引かせた。</p>
 <p>フリニガイ</p>	<p>桶の両側に手縄をつけ、2人でこの縄を引き合ったりゆるめたりして、水面が田より低い池の水をくみ上げた。ふりつるべとも言う。2人の力のかけ具合が大切だった。1回にくめる量は、1～2斗(18～36ℓ)で、効率が悪かった。</p>
 <p>ミスグルマ 水車</p>	<p>用水路や池、川の水を足でふんで田へ入れる。フリニガイに比べるとたくさんの水を田へ引き込むことができたが、足でふむのは大変だったらしい。</p>

じょうせつてんじ のうぐ しゃしん のうぐ ぶく
 常設展示されている農具 (写真の中の農具も含む)

No2



イナオシ

ひざ こし かつた いね つ ば
 膝や腰までつかるドタ (湿田) で、刈った稲を積んで引張
 って運んだ。小さな舟のようになっている。 田舟とも言う。



ナンバ

しつでん さぎょう
 ドタ (湿田) での作業は、足が土にめりこんで歩きづらいた
 め、めりこまないようにはいた。田下駄の一種類。



ナエカゴ
 苗籠

た う なわしろ せいちょう なえ りょうて
 田植えをするために、苗代から成長した苗を両手でつかめ
 るほどにして束ね、オウコでかついで田へ運んだ。竹を編んで
 作った。



ガンツメ
 雁爪

ざっそう ようぶん いね せいちょう さまた
 田にはえる雑草は、土や水の養分をうばって稲の成長を妨
 げるので、田植え後、3回は草取りをしなければならなかった。
 雁爪は、刃先が鋭い鳥の爪のようになっていて、前かがみに
 なって、稲の株と株の間を打ち返して、草をとった。大変つら
 い作業だった。



かいてんじょそう き
 回転除草機

めいじじだい はじ はつめい いね いね
 明治時代の初めごろ、発明された。稲と稲の間を、立ったま
 ま押すようにして進むだけで、草取りができたので大変楽にな
 った。また、土の表面を軽く耕すことで、根に空気や肥料が
 行きわたりやすくなった。



ノコギリ 鎌
 カマ

じょう は いね か つか
 ノコギリ状になった刃で、稲刈りに使う。
 一方、普通の刃鎌は、ノコギリ鎌に比べて刃があつく丈夫に
 作られ、山の木のこえた小枝なども切った。

じょうせつてんじ のうぐ しゃしん のうぐ ぶく
 常設展示されている農具(写真の中の農具も含む)

No3

<p>千齒扱</p>	<p>木の台に鉄、竹、木などの齒を櫛のようにたくさん並べ、稲の穂先を齒に入れて引き抜き、籾粒をおとす。これ以前は、扱箒といって、2本の竹箒で穂首をはさんで籾を落としていた。</p>
<p>箕</p>	<p>穂からとったばかりの籾には、わらやごみ、空籾が混じっているので、これらを分けて取り除くときに使った。</p>
<p>唐箕</p>	<p>箕の機能を機械化、大型化したもの。取手をまわして風をおこし、籾とシブタやわらくずにより分けたり、籾すり後にすり残しの籾や玄米と籾がらにより分けたりする</p>
<p>千石どおし</p>	<p>籾と玄米、また、実った大つぶの玄米と実りの悪かった小つぶの玄米をあみ目を通してより分ける。万石どおしとも呼ぶ。</p>
<p>トマス・トボウ</p>	<p>トマスに入った山盛りの玄米を、トボウで平らにして、ちょうどいっぱいにし(一斗約18ℓ) 俵に詰める米の量をはかる。米一斗は、およそ14Kg。一俵は約60Kg。</p>
<p>俵ジョウゴ</p>	<p>トマスではかった玄米は、わらで作った俵に詰めて運んだ。俵に詰めるとき、俵の口にあてて玄米がこぼれないようにした。</p>